

食道静脈瘤破裂を契機に急速に肝不全が進行し、平成15年1月2日死亡した。CTAは破裂部位の同定に有用であった。

25 自然消退を来した肝細胞癌の二例

三輪 重治・鏑木 優子・五十嵐正人
竹内 学・藤原 孝人・小堺 郁夫
内藤 彰・青野 高志*・高木 聡**
新潟県立中央病院内科
同 外科*
同 放射線科**

〔症例1〕68歳男性。C型慢性肝炎で通院中。H12年12月の採血でAFP 11029ng/mlを指摘。CTにて肝S8に4cmのSOL認め入院。入院までの約6週間でAFP 142ng/mlと著明に低下しており、血管造影では明瞭な腫瘍濃染を認めなかった。S8部分切除するも腫瘍細胞は認めなかった。

〔症例2〕67歳男性。C型肝硬変、糖尿病にて近医通院中。H13年10月の採血でAFP 606ng/ml、CTで両葉に多発したSOL認め当院入院。肝予備能不良で病変が肝全区域に存在するため右前区域、後区域、左葉の3回に分割してTAEを行うも3回目のTAEの際の造影で治療後の右葉に濃染像が多発しており、治療後のCTでも両葉に多発性の早期濃染像を認めた。積極的な治療を断念し外来で経過観察を行ったが同年の年末になっても本人が益々元気なため、11月1日にCTを再検したところ早期濃染が消失していた。腫瘍マーカーも低下し血管造影、CTAP行うも画像上HCCは完全に消失していた。

26 肝原発カルチノイドの一例

古川 浩一・渡辺 和彦・阿部 行宏
相場 恒男・五十嵐健太郎・畑 耕治郎
何 汝朝・月岡 恵・橋立 英樹*
渋谷 宏行*

新潟市民病院消化器科
同 臨床病理部*

症例は81歳、女性。上腹部痛主訴に当科初診。

内服にて症状消失するも、スクリーニング目的に腹部超音波検査にて、多発性の肝腫瘍影を指摘される。身体所見として、皮膚紅潮、下痢、喘息発作などのカルチノイド症候群の所見なし。画像所見としてエコー所見は腫瘍周囲低エコー帯を有する高エコー腫瘍、内部嚢胞所見なし。CT所見はperipheral enhanceを伴う低吸収域を示し、MRI所見はT1強調で低信号、T2強調で高信号。血管造影所見はhypervascularであった。2度のエコー下肝生検にてHE染色で腫瘍細胞のロゼット様配列を認め、chromograninA陽性であり組織学的にカルチノイドと診断。全身検索より極めて稀な肝原発のカルチノイドと診断、リザーバー留置による動注療法を開始した。

27 当院における肝動注リザーバー治療の現況

横田 隆司・日時 亮・藤原 真一
小林 由夏・飯利 孝雄・七條 公利
立川総合病院消化器内科

【はじめに】切除不能の転移性肝腫瘍及び原発性肝癌に対して肝動注化学療法の有効性が従来より報告されてる。今回、我々は当院における同治療の現況について検討した。

【対象】立川総合病院にて1999年5月から2002年12月までの間、肝動注化学療法を目的に肝動脈カテーテル留置を試みた15例（転移性肝癌11例、原発性肝細胞癌4例）

【方法】カテーテル留置は全例大腿動脈経由。使用抗癌剤は5-FUを中心に投与し、留置手技ならびに効果について検討した。

【結果】肝動脈カテーテル留置に成功した症例は15例中、14例（GDA-coil法4例、投げ込み法10例）留置時間は平均150分であった。治療効果としてはCRが1例、PRは7例、NCは4例、PDは1例で投与期間中重篤な副作用は認めなかった。

【考察】症例数が少なく全身投与との比較はできないが治療効果としては有効であり副作用の面からはより安全に投与できると思われる。血管の屈曲、蛇行が強い症例においてはカテーテルの留

置が困難な事があり、逸脱のリスクも高いと思われる種々のカテーテルの選択が重要と思われた。

28 当科における Radio Frequency Ablation (RFA) の現状

高村 昌昭

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野肝臓班

【目的】当科における RFA 施行後の凝固形状、局所再発率および合併症について報告する。

【対象と方法】凝固形状は術後の Dynamic CT の平衡相を用いて 3 次元構築を行った。局所再発率は 2001 年 12 月までに RFA 単独施行した肝細胞癌 24 例、41 結節（平均腫瘍径 17.5mm, 平均観察期間 16 ヶ月）で検討した。合併症は現在までに RFA を施行した肝細胞癌 64 例、126 結節で検討した。

【結果】凝固形状は楕円球状で 3cm 先端針で短軸方向の平均径は 24mm であった。局所再発は約 30% にみられ、その多くは術後 1～2 年の間に確認された。また 1 回穿刺における局所再発率と腫瘍径の検討では、長径 18mm 超の腫瘍で有意に再発率が高かった。合併症は約 30% の症例に認められたが、内科的・外科的処置を必要とした症例は数% であった。

【結語】今回の検討において再発は明らかにサイズ依存性であり、凝固された範囲から考えると、治療直後には認識されない遺残によると推察された。

29 肝内多発性高エコー結節像を呈した晩発性皮膚ポルフィリン症の 1 例

鏑木 優子・三輪 重治・五十嵐正人
竹内 学・藤原 敬人・小堺 郁夫
内藤 彰

新潟県立中央病院内科

症例は 76 歳女性。近医で肝機能障害と腹部超音波検査にて肝内に多発性結節を指摘され、平成

14 年 5 月 28 日当院紹介され受診。HCV 抗体陽性、肝機能異常から、慢性 C 型肝炎に合併した肝細胞癌を疑った。しかし、腹部 CT 検査や MRI 検査では超音波検査で指摘される肝多発性結節は指摘することができず、また腫瘍マーカーも陰性であった。平成 14 年 7 月 2 日、精査目的に入院した。肝生検、腹部血管造影検査等も行い、肝内占拠性病変の存在は否定された。これらの結果から肝性ポルフィリン症を疑い、尿中、便中、血液中のポルフィリン定量を施行したところ、尿中ウロポルフィリンの上昇があり晩発性皮膚ポルフィリン症と診断した。文献的考察を加え報告する。

30 著明な黄疸と腹水を主症状とし、長期の経過をとった肝類上皮血管内皮腫の一例

保屋野 真・上村 顕也・山本 幹
高橋 達・野本 実・青柳 豊
中山 義秀*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野
新潟県立加茂病院内科*

今回我々は肝の萎縮、変形を認め、肝不全を呈し、治療に難渋した肝類上皮血管内皮腫の 1 例を経験したので文献的考察を加え報告する。症例は 51 歳男性。5 年前に肝腫瘍を精査するも確定診断は困難で血管腫を否定できず経過観察していた。腫瘍の増大はなかったが 2002 年 8 月に著明な黄疸、腹水が出現し当科入院となった。画像所見及び血漿中第Ⅷ因子活性が 200% 以上と高値であることから肝類上皮血管内皮腫が疑われ肺転移及び腹膜播種を伴っていると考えられた。全身状態が不良で化学療法は困難で入院 4 ヶ月後に死亡退院された。病理解剖所見、免疫組織学的検索にても肝、肺共に類上皮血管内皮腫と診断された。本腫瘍による肝動脈や門脈の閉塞、腫瘍塞栓が肝萎縮、変形、肝不全の原因となるとされており、早期の診断と治療の開始が本症例のような血管閉塞、血管浸潤による肝不全を予防できると思われるその治療法の確立と共に重要と考えられた。